



からしだね

2017年7月号
(529号)

キリストの受難 カトリック池田教会

共同宣教司牧：畠 基幸 神父・中村克徳 神父

住所：〒563-0041 池田市満寿美町9-26

TEL：072-751-2400 FAX：072-753-4624

URL(ホームページ)：<http://www.ne.jp/asahi/catholic/ikeda/church/>

[index.htm](#)



本号の記事の主題など

中村克徳神父の巻頭言

「悩み苦しみはすべて神に委ねなさい」…2

池田・日生中央合同黙想会…3

大人の日曜学校だより…4

『イエス・キリストを思い起こしてください』を読んで
……………5

信徒奉仕職リフレッシュコースを修了……………7

訂正とお詫び……………7

大腸ガンの手術を受けて(中)……………8

今月の表紙絵……………10

巻頭言

悩み苦しみはすべて神に委ねなさい

中村克徳 CP

人が目標に向かって根気よく努力を重ねる姿は美しいものです。しかし、その目標がある日突然、断ち切られてしまったとしたら、人は何をもって次の一步を踏み出すことができるのでしょうか。

日本で長く宣教されたゲレオン・ゴールドマン神父様は、この問い掛けに明確な答えを見つけた人です。彼はドイツのフルダにあるフランシスコ会の神学生でした。第二次世界大戦が勃発し、ドイツが破竹の進撃を展開している最中に、彼はナチスの親衛隊に徴用されたのです。しばらくして激戦が続くロシア戦線に行くことが決まり、お世話になったシスターにお別れの挨拶に行くと、病床にあるそのシスターはゲレオン神父様にこう言いました。「あなたはロシアには行かないでしょう。司祭に叙階されるためにローマに行く準備をなさい。」そうか、シスターは今の状況を理解できていないのだ、と思い、「わたしのために祈ってください」とお願いしてその場を去りました。

その日の夜、ロシア行きの列車に乗り込み、いざ出発しようとした矢先、「ゲレオン・ゴールドマンはいるか」と、自分の名前を呼ぶ声が聞こえてきたのです。「お前には新たな任務ができた。列車から降りて次の命令を待て。」ゲレオン神父様がホームに降り立つと、すぐに列車は出発しました。後でわかったことですが、ロシアに向かった同じ部隊の兵士たちは激戦地に派遣され、そこで全滅したのです。

現状から考えて次の任地はイタリアになるだろうと予測した神父様は、猛烈にイタリア語の独習を始めました。また、以前から何度も嘆願していた衛生兵への転属が認められ、衛生兵としてイタリアの戦地に赴くことになったのです。赴任先の戦地で傷病兵の手当てをしていくと、多くの兵士が息を引き取っていきます。亡くなっていく多くのカトリック信者に、何とかして神様の慰めを与えてやりたいと思い、彼はある教会を訪ねて主任司祭にこう切り出しました。「私は神学生です。亡くなっていく信者に最後の糧を与えてあげたいので、御聖体を預から

せて頂けないでしょうか。」しかし、主任司祭の答えはNOでした。当時は助祭にならなければ、御聖体を預かることも病人に授けることも認められていなかったからです。「どうしても預からせて頂かなくてはなりません」と言いながら、ゲレオン神父様は懐から取り出したピストルを主任司祭につきました。驚いた主任司祭は、許可状と共に御聖体を渡してくれました。もちろん、そのような許可状は無効なのですが…。

幾つかの戦地で御聖体を授けながら、ゲレオン神父様はローマに到着しました。所属するフランシスコ会の本部修道院を訪ね、教皇様への謁見の橋渡しをお願いし、バチカンへと向かいました。教皇様の前でひざまずくと、胸に秘めた思いが一気に噴き出してきて、これまでの自分の歩みと現状を説明するだけでなく、司祭叙階の特別許可を願い出たのです。ゲレオン神父様の信仰とひたむきさに心を打たれた教皇様は、戦争が終わったら神学の勉強を完了することを条件に、司祭叙階の特別許可を与えてくれました。

神様の御心は本当に分からないものです。あのシスターの予言通りになりました。もしロシア戦線に赴いていたなら、彼の命はそこで終わりを迎えていたことでしょう。神様はどんな絶望的な状況においても、神に望みを掛ける人をお忘れになることはありません。自分の目標が断ち切られたかのように思えるときこそ、神様への信頼を強く抱き続けたいものです。もしかすると、私たちが望んでいた以上のお恵みをご用意なさっておられるかもしれません。

神様の恵みと祝福が皆さんの上にありますように



池田教会・日生中央教会合同黙想会

6月6日、梅雨入りまえの一日、池田教会・日生中央教会合同黙想会が指導者にカトリック武庫之荘教会グイノ・ジェラルド主任神父をお迎えして、3年ぶりに売布の黙想の家でありました。参加者は、27名でした。

沈黙につつまれたしずかな一日になると思っていたのですが、グイノ神父の暖かく楽しいお人柄で笑いにつつまれた一日となりました。ご講話だけではなく、お昼の休憩時間にもどうして神父になられたか、日本へこられたかといろいろと話してくださいました。

ご講話では、神様のいつくしみ、あわれみ、愛そしてゆるしについて話してくださいました。

わたしが印象に残ったおはなしは、どんな残酷なひとであってもキリストは、「わたしは、その人のためにも血を流した」とおっしゃっているので祈りは大切であるということです。世界のいろいろな残酷な出来事を見てただひとと思うのではなく祈りが必要なのをあらためて感じました。聖徒の交わりの話もされてわたしたちは、生きている人そして亡くなったひとのために祈ることが大切だといわれました。失われた祈りはないともいわれました。

またゆるしについては、わたしたちが返せない借金を神様が完全に返してください神様のゆるしは、文句なし、条件なしであるということです。

わたしたちは、おなじあやまち、同じ悪への傾きをくりかえし告白するが、それがなければわたしたちは傲慢になるのでその傾きを残されているということです。また、祈るときは、「わたしを」と祈るより「わたしたちを」と祈るのが効果的な祈りであると教えてくださいました。

研修委員会

合同黙想会に参加できなかった方々のために、グイノ神父様の著書、「お話きかせて」より、一章を選んで掲載いたします。一人黙想会(?)の種になればと願っています。なお、カトリック武庫之荘教会のホームページを開くと、グイノ神父様のお説教などを読むことができます。(広報委員会)

ヤナギの枝で編んだ籠

グイノ・ジェラルド著「お話きかせて」より



山あいの村の小さな木造の家に、一人の老人が小学生の孫と一緒に住んでいました。毎朝起きると、この老人は聖書の身近な箇所を読み、黙想する習慣がありました。おじいさんをとても愛している孫は、彼をよく見てその行いを真似ることが大好きでした。ある日この孫は、おじいさんのように聖書を読もうと決めました。一週間経って、孫はお祖父さんに次のように打ち明けました。「お祖父さん、あなたのように聖書を読もうとしましたが、僕は書いてあることが殆ど解りません。たまに少し理解できても、しばらく経つとそれを忘れてしまいます。ですから、もう聖書を読むことをやめようと思います。なぜなら、聖書を読んでも私には何の利益にもならないと分かりましたから」。

するとお祖父さんはすぐに、石炭の入っている大きなヤナギの枝で編んだ籠を空にして、慈しみの眼差しを注ぎながら孫の手にそれを渡しました。「さあ、今から家の近くにある川まで行って、この籠にできるだけ水をいっぱい汲んで、持って帰ってきなさい」とお祖父さんが言いました。孫はお祖父さんの言うとおりにしましたが、川の水を入れるたびに、その水は籠から直ぐ出ていってしまいました。孫がお祖父さんにこのことを説明すると、お祖父さんは孫に「あなたは走るのが遅すぎるのです。もっと速く走ってご覧なさい」と答えました。孫は何回も何回も努

力しました。しかし、いくら速く走っても籠はいつも空っぽでした。一生懸命に籠に水を汲んで、息が切れた孫は「お祖父さん、お祖父さんに頼まれたことは僕には無理です。この籠は全く役に立ちません。お願いですから、僕にバケツをください」と願いました。

「いいえ、バケツを使ってはいけません。私は君にこの籠にできるだけたくさんの水を入れて欲しいのです。さあ、諦めずにもう一度川へ行きなさい。失敗は必ず成功へのチャンスを与えますから」とお祖父さんは孫を励まして答えました。孫は言われた通りにしましたが、やはりお祖父さんの家まで戻ると籠はまた空っぽでした。「よく見てください。お祖父さん。どんなに頑張っても無理です。こんなに速く走って帰ってきたのに…」と孫は叫びました。すると、お祖父さんは「君こそ、よく見なさい」と言いました。「さあ、落ち着いてこの籠をよく見てご覧なさい。この籠は先ほどまで石炭が入っていたので真っ黒でとても汚いでした。でも今は、こんなに綺麗になっています」と。孫は自分の努力で籠が綺麗になったのを見てびっくりしました。そこでお祖父さんは孫に説明しました。

「聖書を読む時にも同じことが起こっています。君が理解しなくても、内容を覚えていてもいなくても、聖書を読み、黙想するたびに君が知らない間に、君の魂がとても美しくなっています。確かなことは、君の魂は必ず変化します。」とお祖父さんは孫に説明しました。その日から二人は心を合わせて毎朝一緒に、聖書を読むことにしました。そして孫が理解できないところは、お祖父さんが優しく説明してあげました。



人間の古代文明や歴史を通して、神は聖書の中で私たちの心に語ります。しかし、ヘブライ語とギリシャ語で書かれた聖書は、日本語にすると決して理解しやすい書物ではありません。古代の人々の考えや文化、世界観や宇宙万物に対する理解などは、現代人である私たちの考えや文

化、物事に対する理解と非常に異なっています。そういう理由で、人は聖書を読むことを簡単に諦めます。しかし聖書は神の言葉です。優しい父として神は、聖書を通してご自分の心を開き、打ち明けながら私たちの心を開きたいのです。それはその中に、ご自分の限らない愛と聖霊の叡智を豊かに注ぐためです。あなたの永遠の幸せを望まれる神に、あなたの心を閉じてはいけません。むしろ、神の言葉と教えに親しむために忍耐強く聖書を読むことによって、聖書がかけがえのない大切な書物となりますように。この物語の石炭の籠のように、あなたの全てが神のみ言葉によって清められ、変容させられ、聖とされますように。

「大人の日曜学校」便り(5月28日)

「わたしは世の終わりまで、
いつもあなたがたと共にいる」(マタイ 28より)

普段より多く8名が参加。印象に残った箇所を全員が順番にそれぞれ数回読んでから、わかちあった。11人の弟子をまえに、イエスが父の下に帰られる場面。「すべての民をわたしの弟子にしなさい」と命じたあと、常にあなたたちとともに「ある」と励まされて、天にのぼられる。

参加者が異口同音に語ったのは自分の信仰への反省だった。日々の暮らしでトラぶる、手術を受ける、親の介護に疲れ果てる——そんなときは自然と手をあわせて神を呼び求める。だが喉元過ぎれば熱さを忘れる。イエスはいつもいてくださる、と判ってはいても、順調な暮らしが戻ると忙しさにながされて祈りが減る。人間はいつの時代も変わらない。あまり進歩してないのじゃないか…老いを迎えて、これでいいの、かなどなど。いつものように共感あつて励ましあつた。

慈しみを忘れずに日々感謝できるように、と最後は共に祈った。感謝！

研修委員会



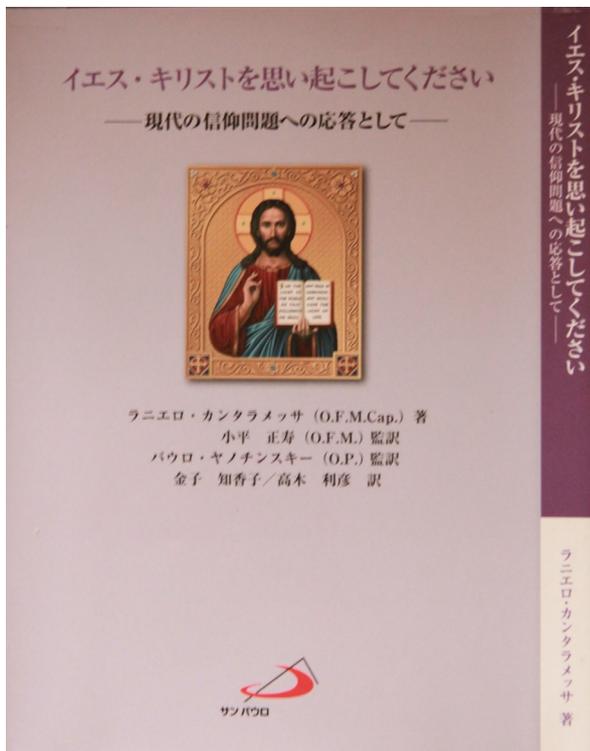
本を読んで

『イエス・キリストを思い起こしてください
-現代の信仰問題への応答として-』

ラニエロ・カンタラメッサ 著

金子知香子・高木利彦訳, 畠基幸校正

サンパウロ2017年刊



「神の義」とは…

杉山

出版にこぎつけるまで、畠神父さまが5年にわたって校正に尽力された本を御紹介しよう。著者カンタラメッサ師はイタリア生まれのフランシスコ会神父。1934年生まれ83歳。1980年ヨハネ・パウロ2世によって教皇公邸説教師に任命された。2005年と翌年、2年にわたってベネディクト16世臨席のもとに開かれた黙想会で、師が語った説教集が本書である。

全体は八章立てで二百ページほどの護教論となっている。こなれた訳文で読みやすい。二部構成。

第一部は「世に打ち勝つ信仰」と題されている。現代世界にはキリスト教からの離反や懐疑があふれている。科学の進歩や無神論、さらにはイ

エスをエンタテインメントの単なるスターに仕立てあげて恥じない芸能界やマスメディアなど、現代文明からの挑戦を次々と受けねばならない「信仰」の再生を、第一部は幅ひろくとりあげる。

第二部はキリストの受難が焦点。話題は前半よりも絞り込まれる。前半で展開された全般的護教論の流れは、個別の特定エピソードへと収斂されてゆくかたちになっている。なぜ受難物語をめぐるきめ細かな説教が本書の半分ほどの分量までを占めるかといえば、ほとんどの信者が受難に含まれる真のメッセージを受けとっていないからだ、と本書は嘆く。

福音書をカンタラメッサ師は「前置きがとても長い受難物語」と定義しており、普通にわれわれ一般信者が考える以上に、受難物語を重要視している。受難の描写や、そのさいのみ言葉にこそ「恵みと光りと救いのエネルギー」が含まれている、と考えるのである。序章が冒頭で語るように、たしかにホスチアとブドウ酒の聖別が済んだあと、ミサで司祭は「受難の記念を祝」う。ミサは受難の記念である。機械的に毎週、あたかも惰性のようにミサに与ってホスチアをいただくのではなく、受難の意味を個人的にしっかりと心に刻みつけることが必要だ、というのが師の思いである。心せねばなるまい。

これまで紹介してきた、現代における信仰の再確認(第一部)を信者として受け入れることは、後半第二部が語るイエスの受難をめぐる議論にスムーズに入ってゆくために不可欠だろう。バチカンの信頼厚いカンタラメッサ師が、護教の立場からキリスト教(特にカトリック信仰)の素晴らしさをあらためて語る言葉は、後半への導入部であると同時に、それだけで独立した前半の山場ともなっている。

本2017年は宗教改革五百周年記念の年である。そのさきがけとなったルターについても触れられている。プロテスタンティズムの基(もと)となつてゆく「神の義」という考え方について解説するなかで、著者は善行ではなくて、福音を信ずることが救済にひとを導くことを改めて力説する。判りやすい言葉で、いわく「人間が自分の生活と習慣を改めて、善を行うようになったわけではありませんでした。『神の義』の新しさは、神がまず行動を起こされたことです。神がまず、罪深い人間にみ手を差しのべ」

たのです、と。だからイエスを信じた人は、そのことだけで「神の恵み」に与ることができる、と明快である。そんなことなら知ってるよ、という向きもあろう。しかしややもすれば、「倫理と福音」あるいは「律法と恵み」という二項並置のなかで、恵みに与るためには、やはり「倫理(律法)」を守らねばならないのではないか、そうしてはじめて恵みに浸ることができるのではないかと考えがちだったのは評者には、カンタラメッサ師の言葉は励ましだった。「神の義」をめぐる解説が、評者にとっては読了後、最大の収穫となったことをお伝えしておこう。

神は外から来られて、人の内に住まわれる

大野

著者カンタラメッサ師は本書全体(200ページ強)では、現代の信仰問題に応答するのを目的とした記していますが、その**第一部全体**(第一章から第四章)では「キリストに対する信仰が現代文明で直面する課題を省察して、キリスト教以前の世界で行われていた時の強く呼びかける神の手法を重視した」と述べています。

第一章では、神がナザレのイエスを通して行ったことについての「告知」である「福音」と様々な「教え」の根源である「愛徳」についての信仰の姿勢を問題とします。パウロは「信仰は聞くことから始まります」(ローマ10・14)と書き、前ベネディクト教皇の言葉『「信仰は聞いたことから始まる」』という主張は、…そこで、信仰と単なる哲学の根本的区別が明示されている。…信仰においては言葉が思想に優先し、…哲学においては思想が言葉に優先し、先ず思索の産物を言葉で表現するわけである。…これに反して信仰は外から人に来るもので、この外から来るということこそ信仰の本質なのである。…信仰は自分で考え抜けるものでもないものとして私にぶつかり…」から、みことばについての告知を聞くことから始まる。その中核的な言葉とは「イエスは主です！」と告げ知らせ、産み落とされる信仰に驚嘆しながらこの告知を受け入れる簡明さを強調しました。

「教え」の根源である「愛徳」の表現は断定的で、権威を浴びた特徴があり、人々相互の理解を目指す会話や対話によって容易に得られるものでなく、神ご自身に由来し、預言の言葉として生まれ、増殖的な性質があり、存在の根拠となるような命を生む種子のようなものに擬えられています。

わたしたちは人々を漁る「漁師」であるより、教会にて定期的に、そして、わたしに対するイエスの正当な権利を認識し、イエスにわたしの人生の手綱を明け渡し、「自分のため死んで復活してくださった方のために」生きることをわたしは望むことなのです(ニコリント5・15)。

第二章に入ると、「ヨハネはキリストの神性と神の御ひとり子としての地位を、福音書の眼目としました」と他の福音書との相違を評価し、ヨハネが「これらのことが書かれたのはあなた方が、イエスは神の子メシアであると信じるためであり、また信じて、イエスの名により命を受けるためである」(ヨハネ20・31)という言葉に尽きるとカンタラメッサ師は書きまします。4つの福音書の中ではミサで読まれることの少ないヨハネの福音書が現代の信仰に於いては重視されねばならないのです。『「私(キリスト)はある」…をあなた方が信じなければ」ならないし、「神のみ業を行うとは、神がイエスを使わされたことを信じることにあります」が、「わたし(イエス)につまづかない者は幸いである」となりがちで、「わたしは道であり、真理であり、命である」(ヨハネ14・6)とイエスが愛した弟子の回心やイエスを愛した聖母マリアの従順を黙想するのを強調します。

第二部全体(第五章から第八章)のテーマは「イエス・キリストの聖なる受難を思い起こして」ですが、イエス・キリストの御受難の描写がもたらす恵みの光と救いのエネルギーに一度も触れることがないままに多くのキリスト者が人生の終焉を迎えてしまい、「あなた方のために苦しみを受け、その足跡に続くようにと模範を示された」(一ペテロ2・21)キリストの父である神との格闘や父への従順、義務的な愛を主観的な記憶とし、命を活かす瞬間のイエスを黙想するのが欠かせないと勧めます。

第五章の主題は「苦しみの中で、イエスはいっそう熱心に祈りました」であり、ゲッセマネにおける歴史上の事実であるイエスの受難において、イエスは熱心に神に祈り、希い、神と格闘し、神と一つになって、死に至るまで従順になり、世界に和解し、人を救し、神はキリストとして復活させましたと師は記します。

第六章から第八章の残り3章では、イエスの教えの核心である、従順と救し、愛がテーマです。師は「神は永遠に愛することをご自身に義務付けられました。神の愛こそが、キリストにおいて「新しい、永遠の」ものとなった契約の核心的な意味で

す(ヘブライ12・24、13・20)」と書きます。愛は永遠を目指すものであって義務としての愛だけが永遠性を保てるとの指摘に新鮮さを覚えます。全8章を駆け抜けましたが、本書のどの部分でも「それは無理！」からいつの間にか「なんと新鮮な！」を感じました。

現代に生きるわたしたちは御言葉や真実に至る手法についての黙想が可能であり、自由を持つのを意識します。ドイツ人牧師ディートリヒ・ボンヘファー(1906～1945)が共鳴していたガンジーの無暴力主義を捨てて、ヒトラー暗殺計画を実行すべく陸軍情報部員となるも発覚したという暗殺未遂事件は、神と世界とのイエスの和解を範とした究極の愛の選択として第2次世界大戦後に強い感銘を与えました。

本年の前半にわたしたちは、日本が否応なく世界の歴史に投げ込まれた16～17世紀の100年間にタイム・スリップしました。茶人としての高山右近に見られたように狭い茶室において人は交わり関係性を築き、時代の激流の渦中にあっても神との和解や社会との和解を可能にしたとの本書の校正者の畠神父の指摘に光明を感じます。一方では、新約聖書さへ読むことがかなわなかった数知れない切支丹の農民が名を告げることなく殉教し、大正遣欧使節の4名と最初のヨーロッパ留学生のトマス荒木の計5名の若者は、権力者によるキリスト教の受容から禁教への政策変更によって殉教者(2名)や棄教者(2名)、病死者(1名)への容赦ない変転を余儀なくされました。それらの人々が行った神への祈りや神との格闘の詳細は未だに明らかではありません。

神への祈りや神との格闘の詳らかな記録がわたしの身近にもあるのに気づきます。「ガンで死んだと思われたくない」と述べてわたしたちから姿を消された松本一宏神父様の遺稿やご受難のイエスが神と格闘して、和解されたゲッセマネの園の舞台上で起きたことを詳述した本書にこそ、神との和解と現代社会との和解の手掛かりがあると感じます。

神は人に命を与え、外から来られて、人の内に住まわれる……、想像を越える存在なのですか？

訂正とお詫び

からしだね6月号に誤記がありましたので、訂正してお詫びいたします。

10p. 題「6月はイエスのみ心の月」の文章中、

誤) ビッグ・アイ「アートプロジェクト」主催、障がいのある人のためのアート・コンクール、
正) 池田ギャルリVEGAでおこなわれた第2回アート・フェイス絵画展。

信徒奉仕職リフレッシュコースを修了

2016年度信徒奉仕職リフレッシュコースを修了した、4人が6月11日、三位一体の主日に修了証書を授与されました。神父様の指名、指示に従い、ミサでご聖体を授けること、病者を訪問してご聖体を届けることが、池田教会での信徒奉仕職者のおもな務めです。これからもよろしくお願ひします。

大腸ガンの手術を受けて(中)

されじお大山

術後は、体力衰え、体重2キロ減の70キロ、倦怠感が治りません。とりわけ道を歩くとき、自分が病人だと痛感します。脚と腹部に力が入らず、トボトボと亀のように鈍い。若い人だけでなく、同年配の方々にも抜かされていきます。

6週間後から抗がん剤治療を始めました。3週間に一度、病院に通って「アバスタチン」という水薬を点滴。さらに、「ゼロダ」いう飲み薬を服用。その日を含めて朝夕各6錠ずつ計12錠。2週間続けます。3週間目はお休み。休み明けに、また通院して点滴。医師がよいと言うまで続けるようです。

さてゼロダ。大きな、大きな粒です。「良薬は口に苦し」。太田胃散や正露丸は、苦いとはいえ、何か人間的な潤いのある味がしますね。

ところがゼロダは、感覚的に言えば「劇薬、砂を嚙むが如し」。体がだるく、胃がムカついたり、歯茎が痛んだり。この原稿も、この回で終わるつもりでしたが、頭が散漫で筆進まず。広報委員さんをお願いして、あと一回、(下)として書き続けることとなりました。

抗がん剤治療について、わたしたち夫婦は、ある種の不信、もしくは誤解を持っていました。医療関係者の懸命な努力で、今は大きく改善されて「標準治療」となっているようです。薬も治療法も患部や症状によって細分化されているようです。でも私どものような年寄りには、昔の記憶がこびり付いています。

10人を超す知人が手術直後は元気だったのに、抗がん剤治療を受けてから、みるみる痩せ細り、髪の毛が抜けるなどして死去されました。「放っておいた方が、もう少し長生きして、安らかに逝けたのでは」と残念に思いました。

前の教会にいた頃、元気いっぱい、美味いうどんを作ってくれた、婦人会の人が、がんの闘病生活。ある日曜日、両肩をご主人と子供たち数人に抱えられて、歩みも覚束なく、聖体拝領席に近づかれました。以前の元気な面影も消えて

息絶え絶えの様子。

また池田教会でも、土曜日夕方のミサに、同じような状態の婦人が車で乗り付け、畳の小聖堂ににじり上がって聖体拝領。頭巾を被っていて、どなたか分からない状態。「体調いかがですか」と聞くと「体が動かなくて、車の運転だけ、やっつとできるのです」。

このお二人に、私は非常に感動しました。聖書に出てくる出血病の女性。キリスト様の衣の裾にさえ触れれば、長患いが治されると信じて、群衆をかき分けて、取って近づいたあの女性を思い出しました。

「人生最後の最も困難なときに、キリスト様に寄りすがるとは、何と相応しく、賢明なことか」。一人の方は、名字が変わっても良いような生活をされていましたが「キリスト様に、これほどまでにすがりつかれたので、すべての罪が赦され、天国に迎え入れられたろう」と確信しました。

家内の方は、私が推定余命6ヶ月と診断されて、信じられないほどの熱意で、準備し始めました。

●「病因は生活習慣だ」。食材を大改革するとかで、白米から玄米へ。砂糖も白から黒へ。または味醂に。コーヒーの味が変わりました。醤油、油、塩なども有機または天然物に変えたようです。

●「エンディングノート」なる物を作成。葬儀の際の連絡先電話帳、手筈などをメモ。遺影も挟みましたが「あれは余りに貧弱。撮り直した方がよい」とか。

●定期預金も解約。金額は雀の涙ほどなのに、死後にすると、子供たち全員の印鑑証明が必要になる手間を省くためだそうです。銀行員だった娘が、ひどくイヤがって「縁起が悪い！まだ早いやん」。これって娘の職業柄の感想もあると思います。

●納骨堂を購入。葬儀には一族郎党20人から30人集まりそうなので池田教会では手狭。玉造のカテドラルまで足を運びました。池田と同じ30万円。墓碑銘に、まだ生きている私の名前を刻むようです。

●自宅での死に備えてポータブルトイレを購入。これには私も不快で「使用は自己責任でしてくれよ。俺は要らんよ」。未だに使用せず、家具調

だったので安楽椅子のように部屋の片隅に佇んでいます。

私が、抗がん剤治療を選んだ動機は、家内のようなオバサマたちの観測によるものではありません。この人たちは「好きなものを食べさせてあげなさいよ。先がないのだから」などと話しています。

一番不安を感じたのは、やはり権威筋の意見です。国立がん研究センター理事長・中釜齊氏「75歳以上になれば抗がん剤治療を受けても、受けなかった場合より長生きするとは限らない」(「文藝春秋」2017年7月号)。

また「反権威」派の意見も説得力あるようです。慶應大学病院の近藤誠医師提唱の「がん放置療法」。多くの人がこの治療を実践しています。近藤医師の著書「医者に 殺されない 47の心得」((株)アスコム発行)を読むと、素人である私の素朴な経験に一致することが、多々あります。「将来は、こんな意見も、標準治療にとりいれられるかも」。ちなみにこの本は菊池寛賞を受賞しました。

自分ではどうすればいいかわからず、カトリック信者として、教会がどのように教えているかを調べました。

結局、この治療を受ける決心をしたのは十字架の聖パウロの教えです。「神のみこころの中で」(ドン・ボスコ社)。『226 病気に関しては、あらゆることにおいて医師に従順でありなさい。228 処置をこばんではなりません』。

ここまで至るには、かなり紆余曲折がありました。余りにも私的で、独断と偏見に満ちたおしゃべりになりそうですが、次の稿(下)で書いてみたいと思います。

大人の日曜学校

主日の福音をゆっくりあじわい、一週間のスタートを切りませんか？

7月は23日です。

研修委員会

7月のガラスケースのことば

思い煩いは、何もかも神にお任せしなさい。

神が、あなたがたのことを心にかけてくださるからです

一ペトロ5・7

今月の表紙絵

ドメニコ・ティントレットが1585年頃に描いた伊東マンシヨの肖像画である。2014年に発見され、大きな話題となった。伊東マンシヨ(1569? ~ 1612)は、豊後のキリシタン大名、大友宗麟の名代として、4少年からなる天正遣欧少年使節団の主席正使を務めた。ミラノ、トリヴルツィオ財団蔵。肖像画は Christian Today <http://www.christiantoday.co.jp> より転載。

天正遣欧少年使節について

1582年、九州のキリシタン大名の名代として、伊東マンシヨ、千々石ミゲル、中浦ジュリアン、原マルティノの4名は、随行する神父たちとともに、長崎からヨーロッパへ向けて出帆した。その目的は、ローマ教皇およびスペイン、ポルトガルの両王に日本宣教の成果を示し、さらなる援助を依頼するためと、偉大なキリスト教世界を見聞し、体験した少年たちが、帰国後にそのすばらしさを語ることで、布教をさらに進めるためであった。少年使節団は1584年にポルトガルのリスボンに到着した。ヨーロッパの王国や公国で次々と大歓迎を受け、イタリアのトスカーナ大公国の舞踏会で、伊東マンシヨは大公妃ビアンカのお相手をつとめて踊ったと伝えられている。老教皇グレゴリウス13世に謁見し、新教皇シクトゥス5世の戴冠式にも参列した。

ヨーロッパでもてはやされたあと、少年使節団はゲーテンベルグの印刷機やリュートなどの楽器を土産に、帰国の途についた。1590年に帰帆したが、日本ではすでに豊臣秀吉のバテレン追放令が1587年に発せられており、4人は苦難の道を歩むこととなる。伊東マンシヨは1608年長崎で司祭に叙階され、間もなく1612年に病死した。原マルティノはマカオに追放され、中浦ジュリアンは穴吊りの刑で殉教した。千々石ミゲルは棄教した。

「遙かなるルネサンス 天正遣欧少年使節がたどったイタリア」展は神戸市立博物館で7月17日まで。

広報委員会 延原



7月の教会カレンダーへ追加されました

- ①14日(金)と28日(金)の14:00~16:00、カール記念館2階にて、福音書を学ぶ会。
- ②15日(土)17:00より、池田教会聖堂にて、十字架の聖パウロ・松本一宏神父様の追悼ミサ。
- ③22日(土)14:00より、池田教会聖堂にて、北摂地区社会活動委員会研究会主催の研修会。フランシスコ教皇の回勅「ラウダート・シ」を翻訳された瀬本正之神父が講師。

尚、WEBにある池田教会のサイトでは修正された7月のカレンダーを見ることができます。

宝塚黙想の家から黙想会のお知らせ

■日帰り黙想会

7月13日(木) 10:00 ~ 15:30

7月14日(金) 10:00 ~ 15:30

指導:山内十束神父



■週末黙想会

7月22日(土) 17:00 ~ 7月23日(日) 15:30

指導:山内十束神父

黙想会、費用等のお問い合わせは「宝塚黙想の家」まで。 ☎0797(84)3111。

編集後記

5月30日「個人情報保護法」が改正された。詳細は専門家に譲るとしても、個人情報の取り扱いについては、教会も今まで以上の配慮が必要となる。広報委員会は『からしだね』(特に外部に直接さらされるWEB版)の取り扱いについて、検討を重ねている。新聞が掲載することになる教会関係者の氏名住所や顔写真については、一定の指針をもつべきだろう。

外部の人を対象に教会活動に関心をもってもらうことは、委員会の大事な仕事である。だが同時に、外部に知られてしまうことで、内部の信者に不利益や迷惑が及ぶことは避けねばならない。悪意を持つ人間はどこにでもいるから。矛盾した側面をかかえる広報活動ではある。「からしだね」本号9ページに詳細なルールを掲載。

直